

受賞者の業績



さとう たえ こ 佐藤耐子氏 54歳(保健婦・岩手県)

昭37年ごろの藤原町の劣悪な交通事情のもと、ことに無医地区、開拓地区等に対し、疾病のみならず衣、食、住の全般にわたる家庭訪問活動を展開し、母子保健中心に保健活動の推進を図った。

また、保健指導員の育成強化、医師、行政の連絡調整にあたり妊婦、乳児の保健指導体制の確立に尽力。乳児期から老人にいたる生涯の健康づくりにおける母子保健の位置づけを行った。



しだ ふみ 志田ふみ氏 40歳(保健婦・山形県)

中山町は山形市から12キロ、ベッドタウンとして年々人口が増加の傾向にあるなかで、町政発展を担う子どもの人間形成に重点をおき、その基盤である母子保健対策の充実強化を図り、住民意識を向上させた。

各種健診の徹底強化を図り、昭和57年から乳児死亡率0を続けている。また母子保健推進員、婦人民生委員、婦人会等と連携を密にし、母乳推奨を徹底して行い、成果をあげている。



おおつか かず こ 大塚和子氏 55歳(保健婦・群馬県)

豊岡保健所勤務当時は長野県に隣接する山間へき地を担当し、未熟児発生子防に全精力を傾け、事業の推進を図った。安中保健所では新生児死亡率の減少を図るため、県下初の妊産婦・ハイリスク児の健康管理を開始し、成果をあげている。

現在は乳幼児期から就学児までの健康管理が行えるよう、関係各機関との連携をとり、全県的なネットワークづくりへと発展させるべく努力している。



さとう けいじ 氏 52歳(産婦人科医・神奈川県)

後遺症のない出産を目指し、「難産」の原因を臨床的に検討。分娩開始時期の定義や分娩経過図表を考案した。さらに、医師・助産婦間の緊密な連携のために、内診を中心とした診察手法を統一し、適切な分娩管理を可能にした。

また、神奈川県周産期医療システム立案・実施に関する幹事長として、良質な母子保健事業を地域に定着させるための指導者として、重要な役割を果たしている。



やまもと けいこ 氏 47歳(母子保健推進員・富山県)

富山県に母子係が設置されると同時に、初代保健婦として総合母子保健対策を推進し、富山県の母子保健の基礎づくりに貢献。

退職後は母子保健推進員として、高岡市のみならず県内の推進員の研修会の講師や、相談役を務め、県下の各地に協議会設立の原動力となり、地域に根ざした活動を展開し、その意欲と関係機関と連携をうまくとる配慮は関係者から高い評価を受けている。



ながた えいこ 氏 52歳(保健婦・長野県)

「母子保健は健康づくりの出発点」と位置づけ、各種健診事業の企画、運営に工夫をこらす一方、未受診者のフォローや健診の事後の保健指導により、受診率の向上に貢献。また、地区保健補導員を組織して連合会を結成し、今日の保健補導員組織の礎を築き、健康づくりの思想を普及させた。

「母と子の広場」の開設は幼児の健全育成はもとより、母親の人間形成にも大いに効果をあげている。



とよだ さいこ 氏 54歳(保健婦・静岡県)

御殿場市は面積が広く、山間の遠隔地で、しかも専門医の少ない地域において、保健活動を地道に積み上げ、医師会とも円滑な関係をつくりながら、母子保健活動を推進している。

乳児死亡、死産率などが高く、なかなか改善されないため、原因把握を目的に10年間、死亡した乳児を対象に実態調査を行い、それをもとに母子保健の管理体制の基礎づくりを行い、実績をあげている。



たなか すずえ
田中 鈴江氏 54歳(保健婦・兵庫県)

山間部の多い豊岡保健所管内は霧が発生しやすく、くる病の発生が多いため、くる病検診を行っていたが、氏は必ず健診前に集団指導を行い、検査の意義、日光浴のさせかた、栄養指導等の予防活動に重点をおき、著しい改善がみられた。

また、浜坂保健所ではへき地の美方町を担当、愛育班を結成し、地域ぐるみの活動で住民の健康意識が高まり、「声かけ訪問」は住民から喜ばれている。



あづま ひでよ
東 英代氏 51歳(保健婦・和歌山県)

湯浅保健所の駐在保健婦として23年。保健所から60キロの山間へき地で乳児死亡の減少を目的に、面積200平方キロにおよぶ駐在地域の家庭訪問を実施する一方、村単位で乳児相談を開設し、住民のいちばん身近な保健サービスの窓口をつくり成果をあげている。

保健所勤務後も、周産期死亡実態調査をして業務機能の分析、反省、評価、再編成へ展開を図るなど、積極的に取り組んでいる。



ひづか ゆみこ
肥塚 由美子氏 50歳(保健婦・島根県)

浜田市合併前の国分町は、妊産婦・乳児死亡率が高く、家庭分娩の多い状況のなかで開業助産婦の協力を得て異常分娩の可能性のある妊婦、問題のあると思われる妊婦への入院の勧奨に取り組んだり、保健衛生の知識の向上と母親の自覚を促す目的で、妊婦教室を開催。

また、婦人会を中心に家族計画指導を行ったが、初回妊娠中毒が減少しないため、青年団に着目、グループ指導をして成果をあげてきた。



こうだ ひさこ
神田 久子氏 52歳(保健婦・山口県)

昭和34年下松市に就職した当時は、赤痢が多発したり、結核患者も多かったが、日夜、衛生教育を行い感染予防と赤痢の撲滅を促した。まだ離島であったころの笠度島の母子の全戸訪問を実施し、疾病予防、感染防止、発育発達の支援や、母親に対する保健指導を行い、乳児死亡率を減少させた。

また、住民の要求にあわせて各種学級の夜間開催を実施し、事業を充実させている。



おき はら あや み
沖 原 綾 美氏 42歳(保健婦・愛媛県)

松山市で住民に保健婦活動を定着させるため、家庭訪問中心に活動し、一人ひとりに親身に対応することにより、住民の信頼を得て活動の基盤をつくりあげた。

マザー教室「友達になりませんか」でコメント入り名簿と全員の写真等を配布し、受講者同士の交流を図ったり、社会教育課と協力し、ヤングミセスの育児入門講座を開設して、育児不安の解消に役立てるなど、ユニークな活動を続けている。



あし みね かおる
安次嶺 馨氏 45歳(小児科医・沖縄県)

県立中部病院に赴任以来、NICUの必要性を痛感し、当局に働きかける一方、日母支部との調整を重ね、昭和53年には県内唯一のNICUの設置に尽力。地域の産婦人科医との連携を強化し、新生児医療に伴う諸条件を整備、極小未熟児、多胎児の医療、健康管理に大きな成果をあげている。

また、小児保健行政へ協力、海外医療研修医を積極的に受け入れるなど精力的に活動を続けている。



はら た のぶ え
原 田 信 江氏 54歳(保健婦・横浜市)

横浜市の保健所で生活保護世帯、および低所得者層の指導を担当し、福祉機関との連携を図り、乳幼児健診、家庭訪問を充実させた。若年妊婦の母親教室の充実、父親教室の開設の中心的役割を果たしている。

受診もれ、発見もれ、対応もれをなくすことを目標に、乳幼児健診の体系の確立と充実を図った。また地域の子育てネットワークづくりを積極的に推進している。



こう や こ
神 谷 トシ子氏 51歳(保健婦・北九州市)

異常妊婦、低体重児、乳幼児の家庭訪問事業、各種健診事業など母子登録制度実施に伴うシステムづくり、母子登録カード作成委員として活躍し、母子保健事業の基礎づくりに努力している。

また、地区助産婦会に妊婦・新生児家庭訪問指導実施委託をしているため、定期的に研修会を行い、的確な保健指導を依頼するなど助産婦会の育成にも余念がない。